

琉球大学学術リポジトリ

Evaluation of the compatibility in VE and VF for tongue cancer

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2014-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 幸地, 真人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29032

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	幸地 真人
論文審査委員	審査日	平成 26 年 3 月 4 日	
	主査教授	金谷文則	
	副査教授	藤田 次郎	
	副査教授	鈴木 新男	
(論文題目)			
Examination of the compatibility in evaluation of VE and VF for tongue cancer 舌癌患者における VE と VF の互換性に関する検討			
(論文審査結果の要旨)			
<p>【目的】 口腔癌患者は外科的手術後、特に頸部郭清術後に一過性の摂食・嚥下機能障害が生じることが多い。筆者らは舌癌患者を対象に、嚥下造影検査 (VF) と嚥下内視鏡検査 (VE) を用いて頸部郭清術後の摂食・嚥下機能評価を行い、その中で VF と VE の評価項目を照らし合わせ、簡便だが評価に主観的要素が強く含まれる VE と、専用の設備が必須で被爆の危険性があるが、より客観的に評価出来る VF との相関を検討した。</p> <p>【対象】 2009 年 1 月から 2012 年 12 月の 4 年間に当科で舌癌に対して舌部分切除および頸部郭清術を行い、術前術後に VF と VE が施行された舌癌 33 例を対象とした。年齢は 28 歳から 80 歳平均 55.9 歳であった。全例で再建術は施行されず、舌部分切除術群 18 例、舌部分切除術と頸部郭清術を行った群 15 例であった。</p> <p>【方法】 VF、VE は術前と術後 2 週～4 週間に検査を行った。VE はエンゲリド®を用い、摂食・嚥下リハビリテーション学会の評価に準じて咽頭残留、喉頭侵入、誤嚥の項目を評価し、加えて咽頭クリアまでの嚥下回数とホワイトアウト時間を測定した。VF 撮影時の体位は座位とし正面、側面撮影を行い舌骨の位置、移動速度、咽頭通過速度 (PRT)、咽頭反応速度 (PTT)、食道括約筋 (UES) の最大開大量を測定した。</p> <p>【結果】 舌部分切除術群では、術前後で PPT および PRT、舌骨の位置、移動速度に変化は認めなかった。舌部分切除術および頸部郭清術群の術前後 PRT は術後で遅延し、PPT も術後に延長する傾向が認められ、また舌骨位置の下後方偏位が認められた。下後方偏位が認められた症例の VE 所見では、咽頭残留、喉頭侵入、誤嚥などの所見が確認された。本研究の結果から、VE の咽頭クリアまでの嚥下回数が多いほど PTT が延長する傾向が認められ、またホワイトアウト時間と PRT にも関連がある可能性が示唆された。</p> <p>【まとめ】 頸部郭清術は、舌骨の位置を下後方に変位させることから、咽頭収縮機能が減弱し咽頭残留などの嚥下機能障害に影響を与えることが考えられた。VF を行う設備がない施設でも、VE を用いることで客観性を持った評価を行える可能性が示唆された。</p>			

- 備考 1 用紙の規格は、A 4 とし縦にして左横書きとすること。
2 要旨は 800 字～1200 字以内にまとめること。
3 *印は記入しないこと。